

## (6) 特別支援教育研究会（通常学級）

会 長 濱田 千穂（東中筋小）  
副会長 溝渕 千波（具同小）  
事務局 石崎 千波（下田中）

1. 研究主題 「一人ひとりに応じた支援を通して子どもたちが生き生きと学べる授業づくり」

### 2. 研究経過

実施年月日	研究のあらまし	会場	備考
令和3年 5月6日（木）	四万十市教育研究会 組織総会 内容：役員選出、研究主題設定、年間計画	中村南小学校	38名参加
8月6日（金）	四万十市教育研究会 夏季研修会 内容：「一人ひとりに応じた支援を通して子どもたちが生き生きと学べる授業づくり」 報告者 弘田 幸嗣教諭（中村中） 講師 西部教育事務所 宮上 美智子 指導主事	防災センター （2F大会議室）	38名参加

### 3. 夏季研修

今年度は、西部教育事務所宮上美智子指導主事と中村中学校弘田幸嗣教師をお招きして、前半に、弘田教諭が高知大学教職大学院で研究した実践報告「発達に課題のある生徒の把握と適切な指導方法の確立」について報告していただき、後半には、今年度の研究主題である「一人ひとりに応じた支援を通して子どもたちが生き生きと学べる授業づくり」について講話をしていただいた。その後、各自が日頃実践している取り組みや、指導する上での困り感などを共有し、宮上指導主事より効果的な支援方法を教えていただいた。

- (1) 報告：研究テーマ「発達に課題のある生徒の把握と適切な指導方法の確立」  
実習テーマ「学習困難の可能性のある生徒の早期把握・支援のシステムづくり」

通常学級で引き継ぎを受けていない生徒の中にも、支援の必要な生徒がいる現状で、入学して早い段階で実態把握する方法、支援の考え方などを研究した実践報告。高知県の小中学校の学力は近年改善傾向であるが、それによって学力重視が高まり LD は教育水準が高まれば高まるほど表出される。LD や学習困難の問題は、学力向上の課程では避けて通ることのできない課題である。「LD の学習困難に起因する中学生の問題を改善するための仕組みの開発」についての研究結果の中で、主に実態把握・支援立案・理解促進の3つのステップについて、それらの具体的な実践内容を紹介していただいた。

総合考察で示されたように、適切な支援には、適切な実態把握が基本となるということを改めて痛感した。また適切な支援方法は、生徒の実態によって千差万別であることや、授業 UD の視点から「学級の子どもたち全員に『楽しく、わかる、できる』授業を行い、躓きのある子には『なくてはならない支援』であると同時に学級の子どもたちにとっても『あると便利な支援』を目指す授業づくりをしていきたい。

- (2) 講話：「一人ひとりに応じた支援を通して子どもたちが生き生きと学べる授業づくり」  
宮上指導主事より以下の4つの内容について講話していただいた。

### ①障害とは

「障害」についての説明（「障害は、障害のある人が障害のない人の社会で生活するときに生まれてきます。心身の機能に不自由さがあると、社会生活に不都合が生じます。それが障害です。」「～ができない」ではなく、「～ができるためには何らかの支援が必要な人」）、教師としての視点と特別支援教育の視点に立った学級づくり・学校づくりについて。

### ②発達障害の特性理解と対応

発達障害とは、「発達障害者支援法」第2条第1項に示されているように、脳機能の発達が関係する生まれつきの障害であり、親の育て方や子どもの性格等の問題ではないことを理解することが大切であることを確認し、特性を理解するためのLD（学習障害）体験をさせていただいた。「あ」と「め」、「つ」と「し」などのよく似た文字を入れ替えて読むことで、LDの子どもはそれらの文字を文章の中でどのように見えているかを知ることができた。LDの子どもがどんなことで苦しんでいるかを知ること、次にどのような支援が必要か、いくつかの事例を挙げて教えてくれた。例えば、音読がうまくできない場合は、1行おきにマーカーで色付けしたり、行間に線を引く。書くことがうまくできない場合は問題を貼ったりマスが大きくなる、補助線をうまく活用するなど実践できそうな内容ばかりだった。また、ADHDの子どもや自閉症スペクトラム症の子どもへの指導・対応についてもその特性に合わせた学びの基本を紹介していただき、より具体的に特性を理解することができた。

### ③ユニバーサルデザインに基づく授業づくり

授業づくりでは、特性に着目した学びの保障を考えることが大切であり「目で見えて覚える方が得意」⇒実物を見せたり、作業手順を文字や絵で示す。「耳で聞いて覚える方が得意」⇒絵や図だけでなく言葉でも説明する。「身体を動かして覚える方が得意」⇒漢字や図形を指でなぞりながら覚えたり、実際に体で体験したりしながら学習することが効果的である。講話ではより具体的な取り組みを教えていただきすぐにも実践できるものばかりだった。その他、情報伝達の工夫（見通しを持たせる）や教材・教具の工夫、評価の工夫についても学ぶことができた。

### ④まとめ

すべての子どもが「分かる」「できる」授業を目指し、指導者として把握しなければならない大切なポイントを確認することができた。

- まずは配慮を要する子どもに気づく
- 学習や生活上抱えている困難を知る
- 困難を改善する手立てを考える
- 手立てを具現化し実践する
- 実践（支援）を評価する
- 支援を共有する
- 保護者の思いやニーズを把握する
- 引き継ぐ

## 4. 今年度の成果

○弘田教諭の報告では「支援立案」の実践で、個別の指導計画の活用の重要性を実感し、指導PDCAサイクルの実現に向けて校内でどのように取り組んでいけばいいかたくさんのヒントをもらうことができた。また、適切な支援を行うためには保護者・生徒・教員の特別支援教育に対する理解から始まることも改めて確認することができた。

○日頃の支援の悩みを共有することができ、アドバイスをいただけることで、実践できる解決策を学ぶことができた。

誰でも参加でき、楽しめる活動

「ひたすらじゃんけん・ピタリじゃんけん」の様子

